

中世府内の館と町

——最近の調査事例を中心として——

高島 豊 河野史郎 塩地潤一

(大分市教育委員会)

はじめに

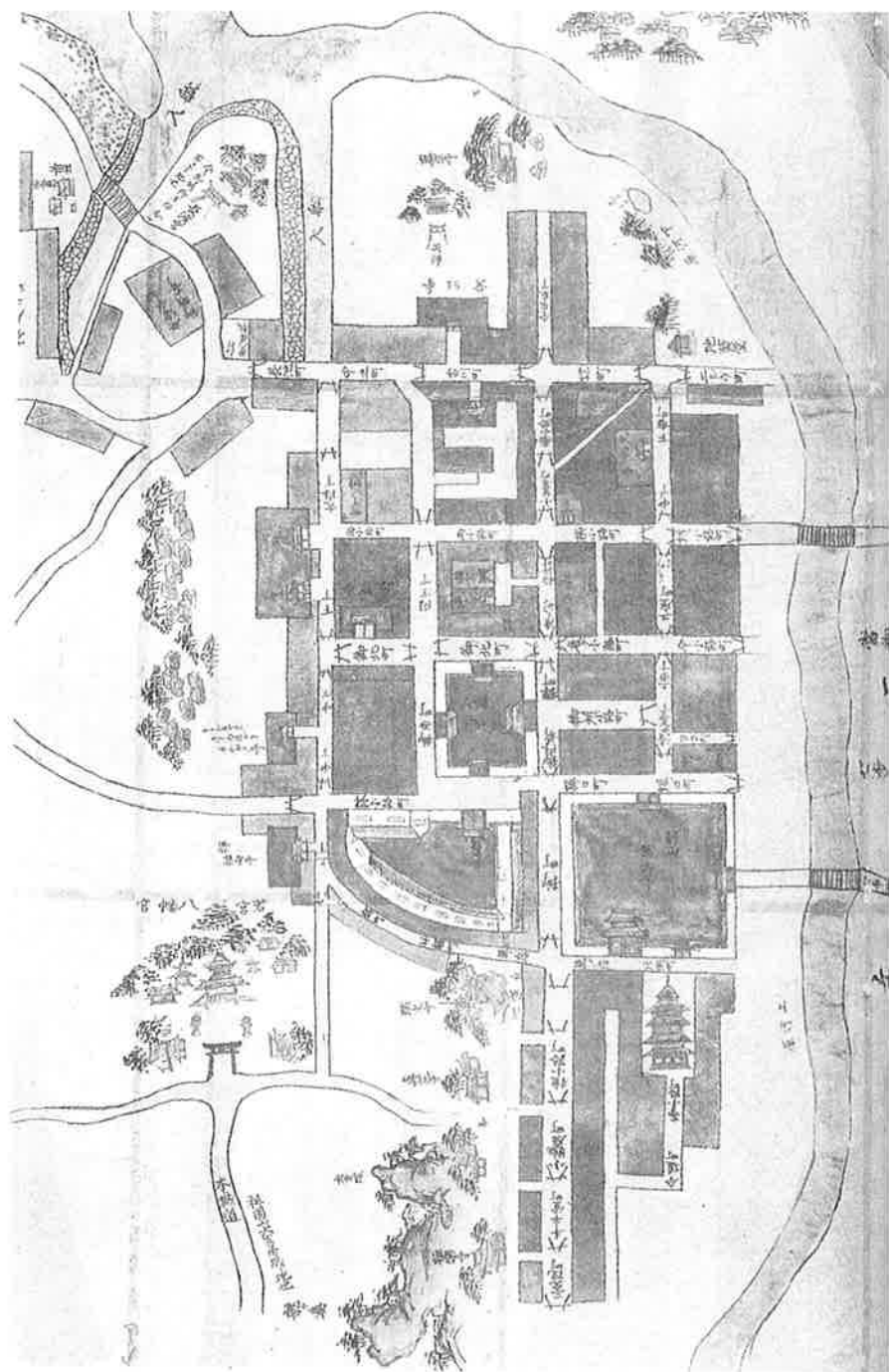
豊後府内は鎌倉時代以降、豊後国の守護大友氏の中心地として発展してきた町であり、戦国期には日本屈指の国際貿易都市として繁栄したことで知られている。

現在、往時の様子を描いたとされる町絵図が数種類残されており、これらの絵図には、大友館を中心に南北四本、東西五本の道路で区画され、辻には木戸を有した四四もの町が描かれている。(第1図)

また、町の四方には広大な敷地を誇る万寿寺や、ダイウス堂と記されたキリスト教会をはじめとする多くの宗教施設が存在していたことが窺える。

既に、一九八七年の大分市史編纂段階において、この絵図の現地比定が行われ「戦国時代の府内復元想定図」が作成されている。このような状況の中、絵図の比定地域における発掘調査の進展によって、推定されていた位置で道路や館が相次いで検出されはじめ、この現地比定作業と絵図それ自体の信憑性が確認されつつある。

本稿は、これら最近の調査概要についてまとめ、中世府内町の実像に迫ろうとするものである。



第1図 「府内古図」(部分)



第2図 戦国時代の府内復元想定図(部分)

一、推定大友館跡の調査

大友館については、「戦国時代の府内復元想定図」により、現在の顕徳町に所在するおよそ方二町の地割がそれであると推定されていた。

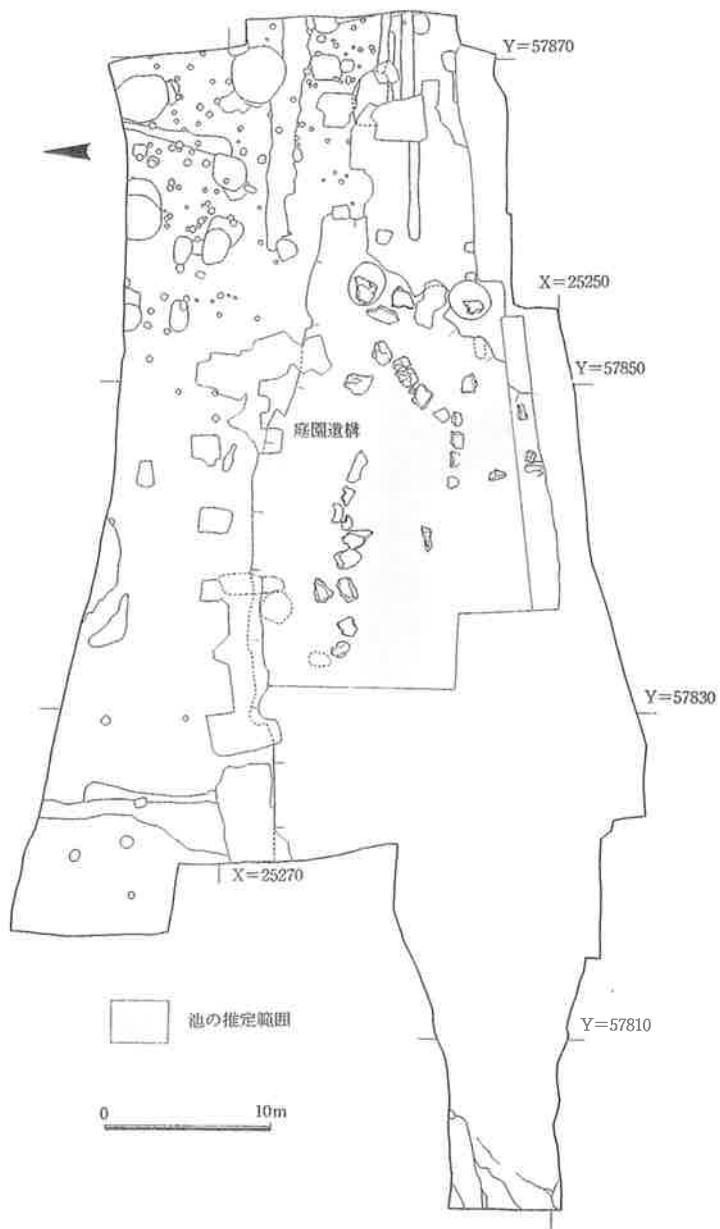
本章では、これまで推定大友館跡で行われた発掘調査の概要についてまとめる。

(一) 第一次調査の概要

第一次調査は大分駅周辺総合整備事業に係る代替地事業に伴って行われた遺構確認調査である。調査地は顕徳町三丁目に所在し、「戦国時代の府内復元想定図」によれば大友館跡の東南隅にあたる。調査は平成十年七月二十一日から平成十一年五月十九日まで行われた。その結果、池を伴う庭園と推定される遺構が検出され、本地点が豊後守護・戦国大名大友氏の館内部である可能性が極めて高くなった。

調査面積の二分の一以上を占めて検出されたのが庭園遺構（SK001）である。他の遺構としては溝・土坑等があるが、多くは庭園遺構の東側あるいは北東側に集中して検出されており、北側には非常に少ない。今回の調査では庭園遺構の確認に主眼をおいたため、これらの遺構の調査は十分でなく、庭園遺構との並行関係は明らかにできていない。また、大友館の外郭となる施設である溝・堀・築地等は検出できなかったことから、これらは、「戦国時代の府内復元想定図」による比定のとおり、今回の調査区よりも外にあると推定される。

庭園遺構は館の推定外郭線に並行し、南北十六メートル以上、東西約三十五メートル以上にわたって検出された。西側・南側にはさらに広がっているものと思われ、東西方向には、最大で五十メートル程度の広がりをもっていた可能性が考えられる。遺構は当時の地表面を約二メートル以上掘り込み、最も深い部分を池にしていたと考えられるもので、池の周辺には巨石を使



第3図 大友館跡第1次調査遺構配置図(1:450)



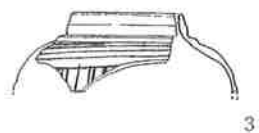
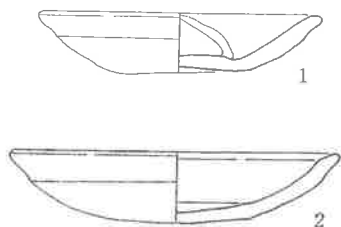
第4図 庭園遺構東端の石組



第5図 破碎された石



第6図 矢穴を有する石



第7図 大友館跡第1次調査出土遺物(S=1/3)

用した石組みが認められ、池護岸及び景石と考えられた。庭園遺構東端は最も良好に石組みが残っているが、東へ行くほど石組みが狭まって収束し、石の高さも次第に高くなるよう立体的に配置されていたことが窺われる。遺構の一部で断ち割り調査を行い土層の確認を行った結果、池底には植物遺体等の有機質を多量に含む青灰色土層が二十センチメートル以上堆積しており、一定期間湛水していたと判断できたが、粘土や石を敷いていた痕跡は確認できなかった。池に水を導入する導水口は検出されなかったため調査区外にあることが考えられるが、池底のグライ層のレベルから判断される地下水位は池底のレベルよりも高いと推定できることから、自然湧水によって水を得ていた可能性も考えたい。護岸状の石組みと庭園遺構の掘り方との間は幅約五メートル程度の緩やかなスロープとなっているが、この部分の土層断面によれば、地表を斜めに掘り込んだ後、下部に粘質土を入れ、その上に砂質あるいはシルト質土を斜めに積み上げて、スロープ状に整地していることが観察され、石組みに用いられた石の多くは粘質土上に置かれていることが看取された。この粘質土下部より出土した京都系土師器（第7図1・2）の年代観により、庭園遺構は十六世紀後半に築造されたか、あるいは最終的な改修が施されたものと考えられる。

検出された石組みの中には人為的に破砕されているものが見られ、池内の二カ所に集中して検出された割石は、破砕して投棄されたものであると考えられる。また、護岸状の石組みも東端部分以外は連続しておらず、かなりの部分が抜き取られていると考えられるほか、移動あるいは倒伏していると考えられる石も存在するなど、廃絶に先立って大規模な破壊を被っていることが認められた。こうした破壊の後、洪水等の自然災害によることも考えられる砂を主体とする土層によりまず池部分が埋積し、さらに残った凹地も人為的に埋め立てられて、近世初頭以降は水田になっている。遺構を覆う砂層の上面あるいはその上の埋め立て土層から出土する遺物の中に胎土目段階と推定される唐津陶器が存在する一方、砂目段階の唐津陶器及び志野が存在せず、さらに出土した京都系土師器の中に十七世紀初頭に比定できるものがないことから、廃絶年代は一五八〇年代〜九〇年代になる可能性が高い。こうした廃絶年代を踏まえて先述した遺構の大規模な破壊についてその原因を考えれば、現状では以下の三者を想定しておきたい。第一には、天正十四年から十五年（一五八六〜一五八七）の島津軍による府内侵攻が挙げ

られる。庭園遺構から出土した陶磁器の中に火を受けたものが多いことから、当該期に館が火災にあった可能性が高いと考えられる。庭園部分も何らかの破壊を受けた可能性が考えられる。第二には、大友義統の豊後除国後、文祿三年（一五九四）府内に入部した早川長敏により館の破却が行われた可能性が想定される。

第三には一五九七年に始まる府内城築城に伴う石垣用石材の回収等による破壊が考えられる。庭園遺構で検出された石の中には、矢穴があげられ、直方体状の石材を割取るうとした痕跡のみられるものがあり（第6図）、これがその傍証になる可能性がある。

庭園遺構から出土した遺物の多くは最上層の埋め立て土層からの出土であるが、タイ産の鉄絵小壺片（第7図3）や華南三彩水注片といった希少な貿易陶磁が認められた。また、天目や茶臼、備前焼盤等の茶器類も多く出土しており、庭園遺構の周辺に所在するとされる会所等の建物との関係が注意される。一方、池底の青灰色土層中からは下駄や漆器椀・皿、扇の要部分等、有機質の遺物が良好な状態で包含されていることが確認できた。マツカサも多数出土したことから、庭園遺構内におけるマツの植栽が想定されるなど、自然科学的な分析による植栽状況の復元も期待される。

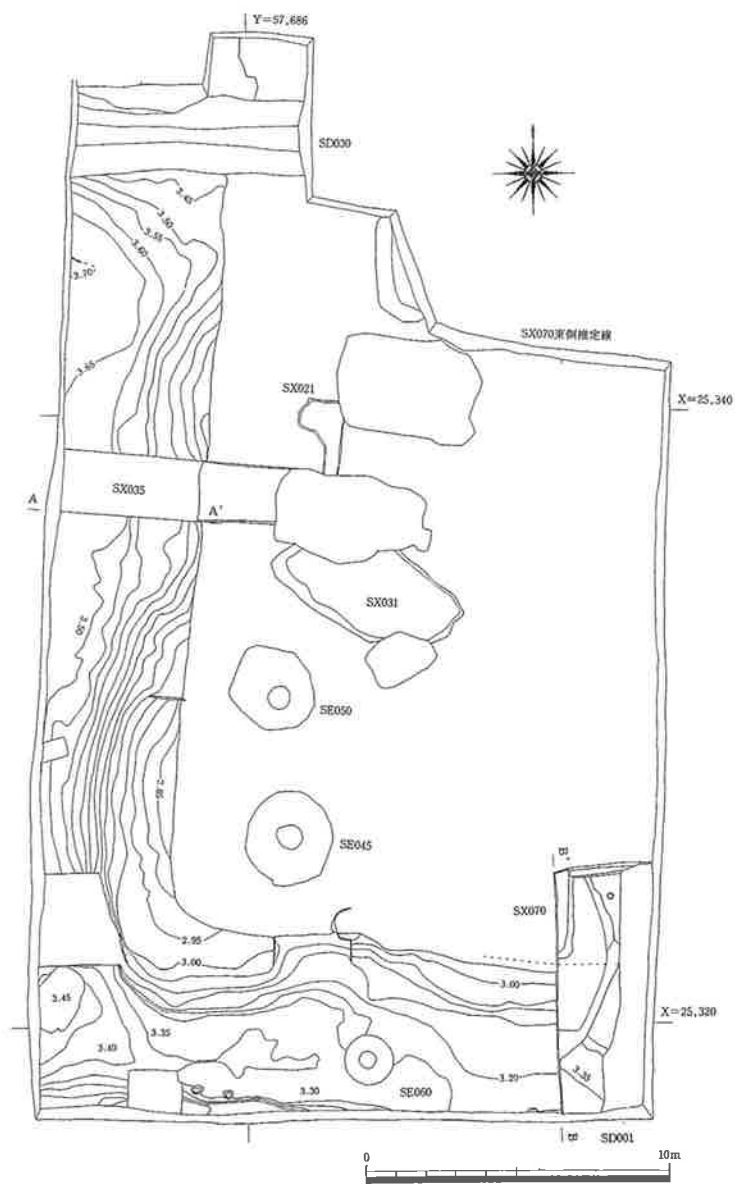
なお、遺構中で使用された巨石には一―三センチメートル大の軽石を含有する安山岩や阿蘇溶結凝灰岩が用いられているが、前者については狭間町に所在する由布川溪谷産との推定もある⁽²⁾。

(二) 第二次調査の概要

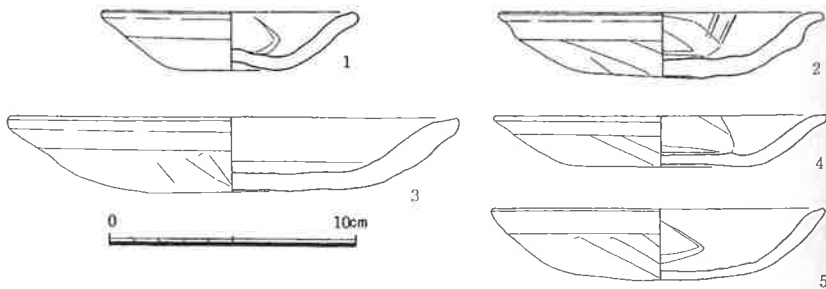
第二次調査は推定大友館西側外郭線上に予定された、マンション建設に伴う事前調査である。調査は平成十年十一月四日から同十一年四月三十日まで行われた。

発掘調査では概ね十六世紀代に比定される整地層ならびに三面の文化面が確認されている。（第11図）

第一面は十六世紀末―十七世紀初頭に比定される遺構である。平面調査を実施した浅い南北溝跡（S3007）は唐津陶器を含

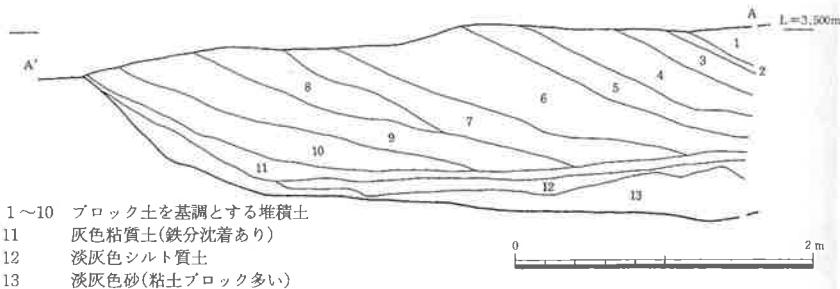


第 8 図 大友館跡第 2 次調査 第 3 面遺構配置図(1:250)



1～3 第2次整地層(SX031出土) 4～5 SE045出土

第9図 大友館跡第2次調査出土遺物(S=1/3)



1～10 ブロック土を基調とする堆積土
 11 灰色粘質土(鉄分沈着あり)
 12 淡灰色シルト質土
 13 淡灰色砂(粘土ブロック多い)

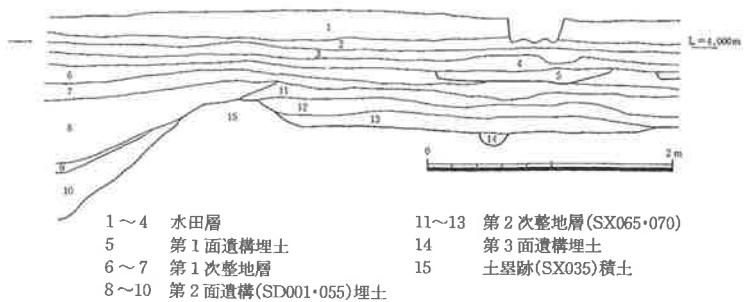
第10図 土塁跡(SX035)土層図(S=1/50)

む唯一の遺構であり、第一次整地層を基盤面として形成されている。この第一次整地層については、調査最終段階における調査区壁の土層観察により検出されたものである。また、この作業では第一次整地層を基盤面として一定量の溜まり状遺構の存在も確認でき、面的な遺構の広がり想定されている。

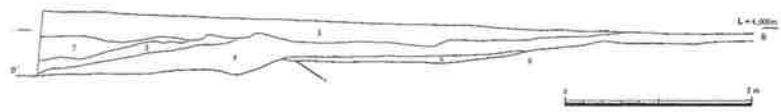
その下位である第二面では、大規模な南北溝跡(SD001)をはじめ、柵列跡や土坑等が検出され、出土遺物より十六世紀末に比定される。

これらの遺構群は十六世紀後半と考えられる第二次整地層(SX065)を基盤面として形成されたものである。遺構密度は少なく、この段階の館の外郭線を示す遺構については検出されていない。

この第二次整地層(SX065)については最深部で約八〇センチメートルを測り、調査区のほぼ全面において確認された大土木地業である。埋土は暗黄茶色ブロック土を基調とし、砂層やシルト質土層の堆積も見受けられるものの不整合な堆積状況を呈しているため、一連の堆積土と判断できるものである。(第12・15図)



第11図 南側調査区壁土層図(S=1/60)



- | | |
|-----|-------------------|
| 1~5 | 第2次整地層(SX065・070) |
| 6 | 土塁跡(SX035)積土 |

第12図 第2次整地層(SX065・070)土層図(S=1/80)

が、調査区外にも延びていることから、検出幅を大幅に上回

現状で南北幅約五メートル、東西幅約六メートルを検出した

外郭線のほぼ中心)においてL字状に屈曲する。その規模は

郭線上において検出されたものであり、調査区内(推定西側

この中でも土塁跡(SX035)については推定大友館西側外

大規模な東西溝跡ならびに井戸跡三基と不定形土坑などであ

検出された遺構群はL字状に折れ曲がる土塁跡をはじめ、

比定される。(第8図)

さらに第三面は第二次整地層(SX065)の下位において確

認された遺構群であり、出土遺物より十六世紀前半)中頃に

を主軸とした大きなプラン(SX070)が想定できる。

また、第二次整地に伴って行われた掘削地業については先

述のSX031をはじめ、調査区壁の土層観察によって南北方向

る。

この出土遺物については第三面の遺構配置図にあるSX031の

ものを図示している。⁽³⁾

第9図の1~3はすべて京都系土師器皿であり、塩地(一

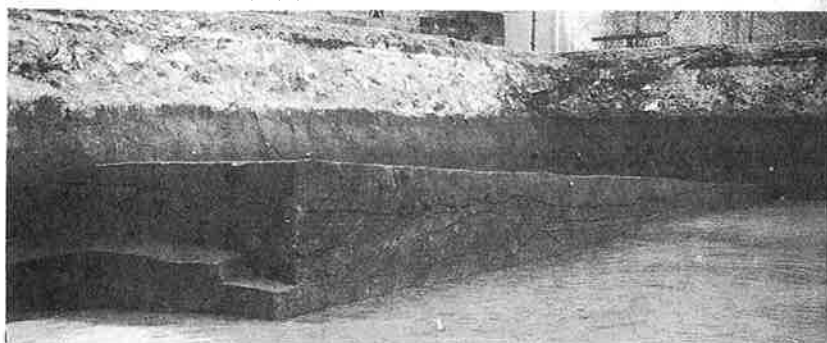
九九八)によれば第二期・十六世紀後半に相当するものであ



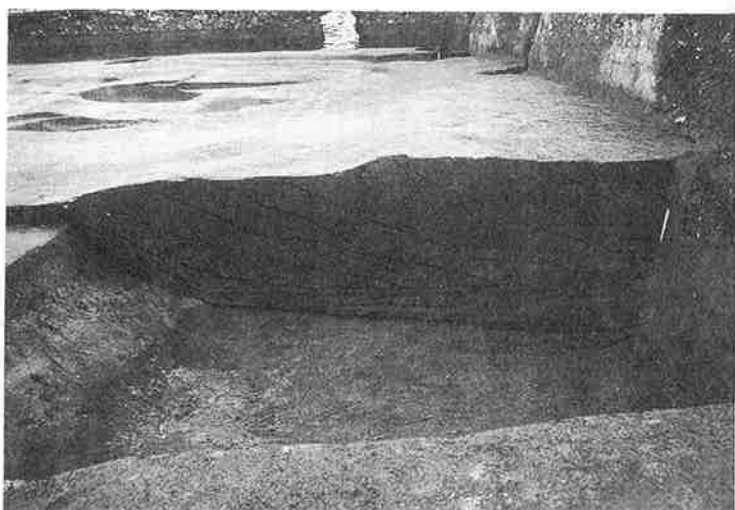
第13図 ガラス製小杯



第14図 鉄砲弾



第15図 第2次整地層の堆積状況(北より)



第16図 土塁跡(SX035)断面状況(北より)

る可能性が高い。基底部から頂部までの比高差は約三十センチメートルを測る。

さらに、その構造については、基盤層を掘り込み、そこに色調や質感の異なるブロック土を斜め方向に積み上げて構築している状況が看取される。(第10・16図)

このSX035については一見すれば、一部削平された溝状遺構とも考えられるが、東西部分の傾斜は先述の第二次整地に伴って行われた掘削地業の方向性と直行して盛り上がっており、掘り方内の斜堆積については土塁の積み土である蓋然性は極めて高いものと判断している。

積み土内からは第二期に比定される京都系土師器皿が出土しており、土塁の構築時期については十六世紀中頃と考えられる。⁵⁾ 今回検出された井戸跡はすべて桶組の井筒を有するもので、出土遺物よりはるかに十六世紀前半～中頃にかけて廃絶したと考えられる。⁶⁾

第9図の4・5に示した遺物はSE005から出土した京都系土師器皿であり、4は井戸の埋め戻しに伴って埋置されたものである。第一期・十六世紀中頃に比定される。⁷⁾

この他にも今回の調査ではガラス製小坏(第13図)や鉄砲弾(鉛玉)(第14図)をはじめ、タイ・ノイ川窯産焼締陶器四耳壺片や華南三彩鳥形水注片、そして威信財として位置付けられる青磁掛花入なども出土しており、戦国大名大友氏にふさわしい遺物組成と言えるものである。

二 中世府内町跡の調査

中世の府内町は、「戦国時代の府内復元想定図」によれば、長さ約二・二キロメートル、幅約八〇〇メートル(現在の春日神社付近に比定される沖浜を除く)の範囲と推定されており、現在「中世大友城下町跡」の遺跡名で周知されている。この範囲内においては現在までに3地点で延べ五次にわたって町屋部分の調査が行われている。

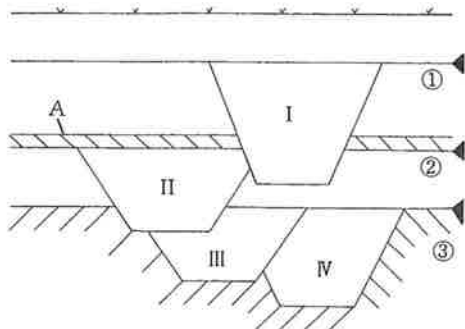
(一) 中世大友城下町跡一次・三次調査

横小路町に比定される地点にあたり、平成八～九年度に駅周辺総合整備事業に伴って大分市教育委員会により調査が行われている。その結果、掘り込み地業により築かれた幅十メートルにも及ぶ道路遺構が、「戦国時代の府内復元想定図」とほぼ一致する位置で確認され、絵図に基づく現地比定作業の正しさが初めて実証された。道路遺構の両側には、十六世紀を主体とする遺構群が濃密に展開していた。道路遺構の地業の下からも溝等の遺構が検出されているが、これらの遺構群からは、京都系土師器が出土しておらず、道路築造時期を知る上で貴重な知見である。とくに注目すべき遺構としては三次調査において道路遺構の北側で検出された、備前焼大甕を二列十基並べて埋設した甕倉と推定される遺構がある。この遺構には大量の陶磁器が焼土や炭化物とともに一括廃棄されており、天正十四～十五年（一五八六～一五八七）の島津軍の府内侵攻後に行われた火災処理と推定された。出土した陶磁器類は東南アジア産陶器類、朝鮮王朝産陶磁器を豊富に組成しており、希少な華南三彩壺を含むなど大友氏が行ったとされる南蛮貿易・対朝鮮王朝貿易の一端を示し、また府内がその一拠点であったことをも示す重要資料として注目される。

(二) 中世大友城下町跡第四次調査

上市町に比定される地点にあたり、平成十年度にマンション建設に伴って調査が行われている。調査の結果、十六世紀末・十六世紀後半・十六世紀中頃・十五世紀代に位置付けられる遺構面が確認され(第17図)、それぞれの遺構面からは、土坑・溝跡・井戸跡・道路遺構・集石等の遺構群が全面に検出された。

三次調査で検出された島津軍の府内侵攻に伴う火災処理土坑は、当該調査区でも確認された。この火災処理土坑の中には道路面を切る形で検出されたものも含まれており注目される(第18図)。尚、こうした火災の痕跡は、十六世紀後半代にも認められている。

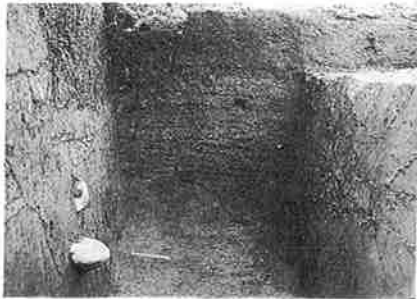


- ①16世紀末の遺構面
- ②16世紀後半の遺構面
- ③16世紀中～15世紀代の遺構面

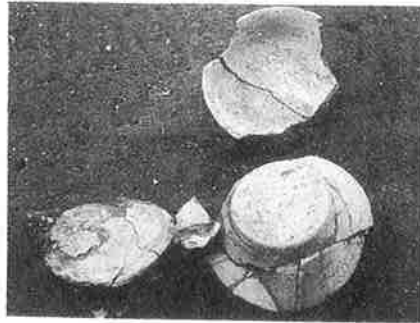
- I 16世紀末の遺構(火災処理)
- II 15世紀後半の遺構
- III 15世紀中頃の遺構
- IV 15世紀代の遺構

A 16世紀後半の遺物を含む焼土層

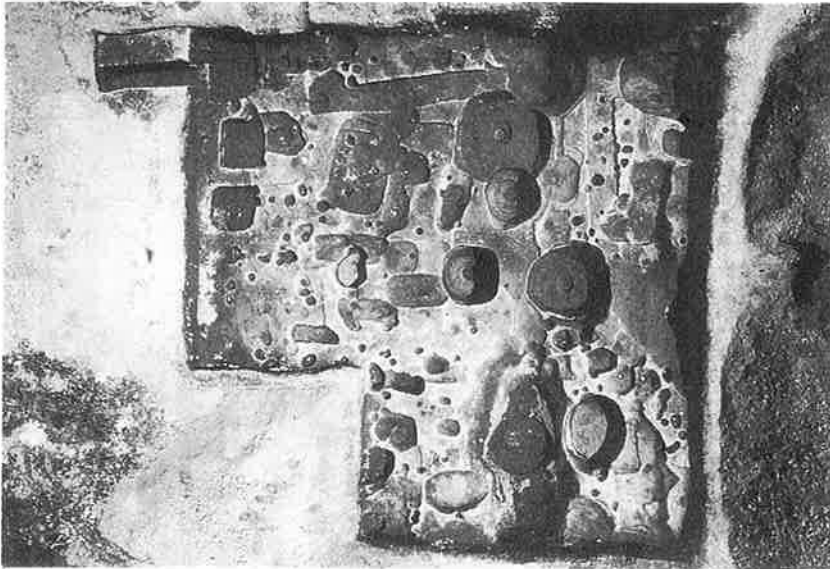
第17図 中世大友城下町第4次調査土層概念図



第18図 道路遺構土層断面



第19図 15世紀代遺物出土状況



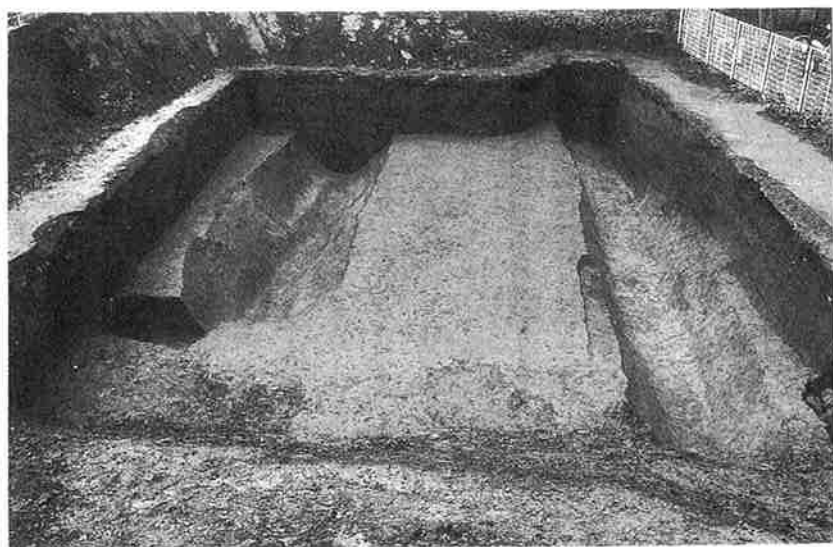
第20図 中世大友城下町第4次調査調査区全景

この他、各時期ごとの注目される遺構には、十六世紀末の遺構面で検出された焼けた石が詰まった土坑、集石遺構、十六世紀後半の遺構面で検出された井戸跡、溝跡の埋土中より貝、魚骨、獸骨等の廃棄された溝跡、最終的には廃棄土坑として使用されているが、その前段階において鑄造関連遺構であった可能性を有している土坑、十六世紀中頃～十五世紀代に遡る井戸跡、土坑等がある。(第19図)

出土遺物については、在地系系切り土師器、京都系土師器皿、鍋、播鉢、火鉢等の雑器類、青磁、白磁、染付等の輸入陶磁器類、備前焼、瀬戸、美濃窯系等の国産陶磁器がある。在地系系切り土師器、京都系土師器、皿については、各時期ごとにおける両者の共存関係や、京都系土師器のみによる埋納等が確認されている。鍋、播鉢、火鉢等の雑器類については、周防系とされる播鉢等の出土が一定量認められる。輸入陶磁器類については、青磁、染付における焼成不良の粗製品が認められることと、華南三彩、タイの四耳壺、ベトナム産白磁等中国南部及び東南アジア産の陶磁器の存在が認められる。国産陶磁器については、瀬戸美濃窯系の遺物の確認が特筆される。

(三) 大手町の調査(府内城城下町跡第十二次調査)

調査地点は、戦国時代府内の北端に位置する舟入に近く、穴打町の西あるいは長池町の南に比定される位置にあたる。平成十一年七月二日から九月十四日まで行われた調査で近世遺構の調査後に実施した下層の調査により、府内城築造時と考えられる十七世紀初頭の整地層の下から、幅約二メートル、深さ約一メートルの溝が2条検出された。いずれも十六世紀末までに埋積した溝であり、底部付近で出土した京都系土師器から掘削年代は十六世紀中頃に遡ると推定された。溝は、心々間約六メートルで並行して2本の溝に延びているが、一方は約十メートルで途切れ、もう一方が調査区を貫通して三十五メートル以上続いていることが確認された。後者からは「光盛」「さい良」「さかいち」と判読できる文字がそれぞれ底面に墨書された3点の京都系土師器皿と、「右」と墨書された底部系切りの土師器皿一点が出土していることが注目される。これらの溝は間に



第21図 大手町戦国期溝状遺構



「光盛」



「さい良」



「さかいち」



「右」

第22図 大手町S D201より出土した墨書土器4点

挟まれた空間を路面とみなせば、道路遺構の側溝とも考えられるが、中世の府内において検出されている主要な道路遺構はいずれも路面が版築状の掘り込み地業によっているのに対し、本地点で検出されたものは路面とみなした部分が地山のままである点で異なっている。従って、現状では何らかの区画溝と考えておきたい。

本地点において当該期の遺構は以上の溝のみであり、戦国時代末になっても遺構密度は低く、先述した2地点の調査所見とは大きく異なることが判明した。

三 館と町の変遷

以上のような、中世府内における発掘調査によって明らかとなった事実を踏まえ、ここでは「都市」府内の発展過程についてまとめてみたい。

(一) 館の規模と変遷

推定大友館跡における発掘調査では、先述のとおり館の存在を裏付ける遺構群が検出された。

その初現については現状では不明と言わざるを得ないものの、絵図により復元された大友館は方二町もの規模を有し、その西限に位置する第二次調査において十六世紀中頃に比定される館の西側土塁が確認された。

この土塁跡については調査区内においてL字状に屈曲しており、この段階の館が従来の復元プランと異なった様相を呈していた可能性が指摘されている。

また、十六世紀中頃～後半にかけては西側土塁と重複して遺構が展開するようになり、さらに十六世紀後半には土塁が削平され、最深部で約八十センチメートルを測る大規模な盛土整地によって館内が整備される。この整地面に形成された十六世紀末段階の遺構には館の西限を示すものは確認できていない。

以上のことから、この盛土整地は館の拡張を意図した大土木地業である蓋然性は極めて高い。

第一次調査で検出された庭園遺構はこの盛土整地が行われた十六世紀後半に造られたことが判明しており、館の整備・拡張に伴って庭園遺構も造られた可能性が考えられる。

この庭園遺構については十六世紀最末期（一五九〇年代）には大きく破壊されており、館の廃絶時期を示唆していると判断される。

また、第二次調査においても第一次整地層を基盤面として十六世紀最末期に比定される遺構群が確認されており、戦国末期における館の再整備を想定することも可能である。

(二) 町の形成時期 町の発展 被災と復興

中世府内町は、平安時代末に大分川河口西岸一帯に開かれた「市」がそのルーツとなったと考えられている。¹⁰「市河」と呼ばれた大分川河口西岸一帯は、中世府内町の「上市町」「工座町」にあたることから、平安時代末に遡る遺構の存在が期待されたが、今回の調査では確認されなかった。

一方、中世府内町の形成時期に関する資料としては、「横小路町」の調査における、道路遺構下層の京都系土師器を含まない十六世紀前半以前の溝跡、「上市町」の調査における十五世紀代の遺物を含む土坑等があり、その成立時期に関して貴重な情報を提供している。

中世府内町を象徴する遺物に国際色豊かな輸入陶磁器の一群がある。中でも特に注目されるのが、タイの四耳壺・ミャンマーの三耳壺・ベトナムの白磁・長胴瓶・華南三彩等の中国南部及び東南アジア産の陶磁器であり、これらの遺物は、即ち大友氏による活発な貿易活動を示していると考えられる。

大友氏の祭器である京都系土師器については、町屋においても普遍的にみられることが確認されている。加えてその初現も

古く、館と同じ十六世紀中頃には見られるようである。

中世府内町をおそった災害、特に火災については、特に重要な情報が含まれている。上市町の調査では、十六世紀後半段階の遺物が含まれる焼土層が確認されており、火災後の整地の状況を窺わせる資料として注目されている。

横小路町の調査において検出された大甕埋設遺構(SX210)は、天正十四年(一五八六年)の島津軍による府内侵攻時の火災処理に用いられていることが確認されている。この時期の火災処理土坑については、上市町の調査においても確認されており、この火災による被害がかなりの広範囲にわたっていることを物語っている。この島津軍による府内侵攻後の府内町の復興であるが、これに関して現状では、「天正十六年参宮帳」^(註)から町の再建が想定されているが、「横小路町」「上市町」の調査共に、その間の指標となる唐津陶器を伴う遺構が皆無であり、現状ではその再建説には疑問を投げざるを得ない状況である。

以上のことから、館と町の変遷過程においては十六世紀中頃に大きな面期が存在すると考えられる。

具体的には館に土塁が築かれた段階に町の中心部では道路が整備され、絵図に記された府内の範囲までようやく町が形成された可能性を指摘できる。

一方、島津軍の侵攻による荒廃の後現状では町屋の復興が見受けられないの対し、館では一部再整備が想定される事を認める事ができる。しかしながら、館の庭園遺構については再建されていないことなど、再整備の規模ならびにその目的については今後の検討課題である。

おわりに

現在までに行われた中世府内についての発掘調査は、5地点、延べ七次でしかなく、未だ調査は緒にたばかりである。

しかし、これまでの調査により、中世府内町の遺構保存状態が予想以上に良好であることが明らかになってきた。近世府内城下町は中世府内町を北西側に移動させて建設され、現在の大大分市中心部はこの近世城下町を基礎として発展してきた。このため、中世段階の府内町は、破壊されることなくほとんど丸ごと保存されていると考えられる。

本稿では、考古学的資料の提示を主としたため触れていないが、近年中世史研究者の間でも大友館を中心とする府内の発展及び変遷についての研究成果が提示されはじめており、こうした文献史料による研究成果との対比を行いながら調査を進める必要がある。

また、府内及びこれを含む大友氏本国の豊後については、京都系土師器の普及や貿易陶磁の豊富な流通において、他の戦国期の都市遺跡や戦国大名城下町及びその領国に比べて特異な現象が次第に明らかになりつつあり、今後資料整理を行う中で考察を進めたいと考えている。

最後になりましたが本稿を執筆するにあたり、秦政博氏（大大分市教育委員会）、鹿毛敏夫氏（大大分県先哲資料館）にはお世話になりました。末筆ながら記してお礼申し上げます。

註

(1) 大大分市史編纂委員会一九八七 『大大分市史 中』 大大分市

一九八七 「戦国時代の府内復元想定図」 『大大分市史 中巻付図Ⅱ』 大大分市

(2) 日高稔氏（大大分市文化財調査委員）より御教示をいただいた。

(3) SX031は第二次整地（SX065）に伴って行われた掘削地業の平面プランであり、その埋土はSX065と一連の堆積状況を示す。このことから、SX031出土遺物については盛土整地の年代を示唆するものと判断している。

(4) SCSGからは破片資料が多いものの、中国染付碗のB-II類やE類、皿のB-II類をはじめとして、中国南部産の白磁や豊後型火鉢片、そして京都系土師器(II期)などが出土しており、十六世紀後半に比定される。この所見は先述した操作の妥当性を裏付けるものとして捉えられている。

(5) 以下、京都系土師器の型式変遷については塩地(一九九八)に依拠する。

(6) 今回検出された三基の井戸跡からはそれぞれ廃絶時期を想定できる遺物が出土している。その中でも土墨を壊してつくられたSCSGからは中国染付皿B-I類片をはじめ、大量の糸切り土師器が出土している。

(7) 今回の調査はこれまでの京都系土師器の型式変遷案を層位的に検証することができた調査としても注目されるものである。

第二面↓第二次整地層↓第三面という層位的な変遷に対し、各層から出土する京都系土師器については第3期↓第2期↓第1期と符合して型式変化が認められ、これまで提示されてきた型式変遷の妥当性を証左している。

(8) 大分市教育委員会により調査、現在整理作業中である。

(9) 調査後間もないため、十分な整理作業が行なえておらず、ここでは調査時の所見を述べる。

(10) 木村幾多郎 一九九七「豊後府内の都市建設」『大分・大友土器研究 第21号』大分・大友土器研究会

玉永光洋 一九九七「豊後府内の形成と寺院」『中世都市研究4都市と宗教』中世都市研究会

(11) 即ちこの被災の後府内町が近世府内城下に移転するまでの約二十年間(一五八七~一六〇七年)のうちに町が再建されたかどうかである。

(12) 「天正十六年参宮帳」は、中世府内町の住民の名前が居住地と共に出てくる史料で、天正十四年の島津侵攻によって被害を受けた住民の健在を示す史料として用いられている。

参考文献

高島 豊 一九九七「中世大友城下町第一・二次調査」『大分市埋蔵文化財調査年報 vol・8 一九九六年度』 大分市教育委員会

一九九八「中世大友城下町第三次調査」『大分市埋蔵文化財調査年報 vol・9 一九九七年度』 大分市教育委員会

大分市教育委員会 駅周辺総合整備発掘調査班

一九九八「中世大友城下町(中世府内町)発掘調査事始め」『大分縣地方史第170号』 大分県地方史研究会

塩地 潤一 一九九八「大友領国内における京都系土師器の分布とその背景」『博多研究会誌 第6号』 博多研究会

原稿募集

大分県地方史研究会では、会員の皆さんの原稿をお待ちしています。論説・研究ノート・史料紹介・調査報告・研究動向・会員だよりなど、次の点に留意して積極的に投稿して下さい。

一 連載は上下二回までとする。

二 特別製版を必要とする原稿は、完全原図に限り点数を制限しない。

三 抜刷りは一〇部のみ会で作成する。それ以上の増刷については、執筆者の負担とする。表紙は会で作成する。

四 原稿は事務局に郵便書留で随時送付願います。